

### 【今日の説教から】

ヨハネの福音書の書き出しを思い起こさせるこの1ヨハネの手紙です。

「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。」

初めからあったもの、世の初めから存在し、神と共にあられたお方が私たちに聞かれるもの、私たちに見られるもの、よく見て触れることが出来るまでに近づかれたということ、そしてそれはいのちの言葉であったということ。

私たちにその交わりが与えられました。それは親しい相互の交わりです。それは父なる神様と、御子イエス・キリストとの交わりです。父なる神様は、子なるキリストを通してご自身を現されました。

「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである」(ヨハネ 14:6-7) 父なる神様はこの御子を通してご自身との交わりを私たちにお与えになられました。御子は私たちための尊い命の道であり真理です。迷わぬようにしっかりと見つめましょう。

皆様おはようございます。

あの能登半島の大震災から2週間、その被害の全容が克明に解明されつつある中、被災者の方々の避難所での暮らしも寒さの中困難を極めるといふその状況も明らかになってまいりました。1時避難所は余りにも過酷な環境であり、物資も限られ、収容人数も限られており、車中やビニールハウスで生活する方々の姿がありました。そこから1.5次避難所、2時避難所という言葉が聞こえ始めてまいりました。温かいみそ汁を飲むだけでああ久しぶりだと涙を流す方、泣くのはよしなさい、みんな一緒に泣いてしまうと語られる方、そんな姿をテレビで見ました。暖かい所で、暖かい布団で足を伸ばして眠れる、トイレに困らず、着替えに困らず、お風呂に入れる、そんな当たり前だと思っていたことからあれ以来くつきりと隔たってしまった方々のご苦勞と、ご家族を失ったという、埋めようもない心の喪失感の中にあつて、被災者の方々に天からのお慰めが豊かに注がれますようにと心を合わせてお祈りいたします。

2000年前、父なる神様は暗き人の世の中に愛する御子を犠牲としてお送りくださいました。愛を失い、自己中心に生き、他者を顧みない、冷たく冷え切った世界、滅びゆく世界、罪と死と呪いにつながれた世界に、救い主を送って下さいました。愛を、光を、命を送って下さいました。

1 初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について――

このヨハネの手紙の書き出しを見ますと、私たちはヨハネの福音書の冒頭を思い出すのではないのでしょうか。

1:1 初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。

1:2 この言は初めに神と共にあった。

1:3 すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった。

1:4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。

1:5 光はやみの中に輝いている。そして、やみはこれに勝たなかった。

1:9 すべての人を照すまことの光があつて、世にきた。

1:10 彼は世にいた。そして、世は彼によってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。

1:11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかった。

1:12 しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである。

初めに神はおられ、そして御子もまた神と共におられました。

その御子、「すべてのものは、これによってできた。できたもののうち、一つとしてこれによらないものはなかった」という世の造り主でもあられる御子キリスト・イエスは二千年前、この世の中に来られ、私たち人類にとって「目で見えたもの、よく見て手でさわったもの」となられたのです。

私たち人類の目で見ることが出来る方としてこの世界に降り立たれ、私たちがよく見て、その方に手で触れることが出来るまでに近い存在として私たちの所にお越しになられたのです。そしてその方はいのちの言葉、私たちに命を与える存在でした。

1 初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て手でさわったもの、すなわち、いのちの言について――

2 このいのちが現れたので、この永遠のいのちをわたしたちは見て、そのあかしをし、かつ、あなたがたに告げ知らせるのである。この永遠のいのちは、父と共にいましたが、今やわたしたちに現れたものである――

いのちが現れました。ヨハネ福音書にこうある通りです。

1:4 この言に命があった。そしてこの命は人の光であった。

いのちが現れた。このいのちとは、永遠のいのちの事です。私たちは今生きている時、命があります。しかし同時に、私たちは死に向かっています。誰もが死を体験します。しかし、永遠の命を持っているものは、肉体の命が尽きようとも、生き続けることができます。

ヨハネ 11:25 イエスは彼女に言われた、「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

11:26 また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか」。

黙示録 20:6 この第一の復活にあずかる者は、さいわいな者であり、また聖なる者である。この人たちに対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。

20:12 また、死んでいた者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っているのが見えた。かずかずの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これはいのちの書であった。死人はそのしわざに応じ、この書物に書かれていることにしたがって、さばかれた。

20:13 海はその中にいる死人を出し、死も黄泉もその中にいる死人を出し、そして、おのおのそのしわざに応じて、さばきを受けた。

20:14 それから、死も黄泉も火の池に投げ込まれた。この火の池が第二の死である。

20:15 このいのちの書に名がしるされていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

みな生きている。死んだ後のことは分からない。今生きている時に最大限自分の望みをかなえる生き方をする。少々道に外れたことをしたところで、人に知られなければ構わない。要するに手段を選ばずにお金儲けにさえ成功して豊かな生活をして勝ち組になればいいのだという考えが多数なのではないでしょうか。しかしそのような生けるしかばね(1テモテ 5:6)のような生き方を捨てて、命に進みなさいと言うのが聖書の教えです。

エペソ 4:17 そこで、わたしは主にあっておごそかに勧める。あなたがたは今後、異邦人がむなしい心で歩いているように歩いてはならない。

4:18 彼らの知力は暗くなり、その内なる無知と心の硬化とにより、神のいのちから遠く離れ、

4:19 自ら無感覚になって、ほしいままにあらゆる不潔な行いをして、放縦に身をゆだねている。

4:20 しかしあなたがたは、そのようにキリストに学んだのではなかった。

4:21 あなたがたはたしかに彼に聞き、彼にあって教えられて、イエスにある真理をそのま

ま学んだはずである。

4:22 すなわち、あなたがたは、以前の生活に属する、情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、

4:23 心の深みまで新たにされて、

4:24 真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである。

私たちは、生まれながらの私たちは、神の命から離れているのです。幹から離れた枝なのです(ヨハネ 15 章)。幹から離れた枝は身を実らせることが出来ません。大切なのは、神様とのお交わりを頂くということ、そして命をいただくということなのです。私たちの心臓が鼓動しているだけでは、私たちは本当に生きているとは言えない、私たちが生きているということは、神と共にあり、永遠の命に生かされているということなのです。

伝道者の書 3:11 神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。

3:12 わたしは知っている。人にはその生きながらえている間、楽しく愉快に過ごすよりほかに良い事はない。

3:13 またすべての人が食い飲みし、そのすべての労苦によって楽しみを得ることは神の賜物である。

3:14 わたしは知っている。すべて神がなさる事は永遠に変わる事がなく、これに加えることも、これから取ることもできない。神がこのようにされるのは、人々が神の前に恐れをもつようになるためである。

12:1 あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ。悪しき日がきたり、年が寄って、「わたしにはなんの楽しみもない」と言うようにならない前に、

12:2 また日や光や、月や星の暗くならない前に、雨の後にまた雲が帰らないうちに、そのようにせよ。

12:3 その日になると、家を守る者は震え、力ある人はかがみ、ひきこなす女は少ないために休み、窓からのぞく者の目はかすみ、

12:4 町の門は閉ざされる。その時ひきこなす音は低くなり、人は鳥の声によって起きあがり、歌の娘たちは皆、低くされる。

12:5 彼らはまた高いものを恐れる。恐ろしいものが道にあり、あめんどうは花咲き、いながらはその身をひきずり歩き、その欲望は衰え、人が永遠の家に行こうとするので、泣く人が、ちまたを歩きまわる。

12:6 その後、銀のひもは切れ、金の皿は砕け、水がめは泉のかたわらで破れ、車は井戸の

かたわらで砕ける。

12:7 ちりは、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る。12:8 伝道者は言う、「空の空、いっさいは空である」と。

12:9 さらに伝道者は知恵があるゆえに、知識を民に教えた。彼はよく考え、尋ねきわめ、あまたの箴言をまとめた。

12:10 伝道者は麗しい言葉を得ようとつとめた。また彼は真実の言葉を正しく書きしるした。

12:11 知者の言葉は突き棒のようであり、またよく打った釘のようなものであって、ひとりの牧者から出た言葉が集められたものである。

12:12 わが子よ、これら以外の事にも心を用いよ。多くの書を作れば際限がない。多く学べばからだは疲れる。

12:13 事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。

12:14 神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである。

1:3 すなわち、わたしたちが見たもの、聞いたものを、あなたがたにも告げ知らせる。それは、あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである。

1:4 これを書きおくるのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるためである。

「わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである」様々の交わりがあります。しかし私たちが最も求めるべきものは、私たちが愛して私たちのために命を捨てて下さった御子イエスキリストです。そして御子を見る者は父なる神様を見るのです。

「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。もしあなたがたがわたしを知っていたならば、わたしの父をも知ったであろう。しかし、今は父を知っており、またすでに父を見たのである」(ヨハネ 14:6-7)

イエス様の弟子たちの見たイエス様、この方の内に愛があり、忍耐があり、赦しがありました。人の罪の身代わりを遂げさせ、命に入れようとする父なる神様のメッセージ、これを受け取り、父と御子との交わりの中に身を置くものには永遠の命が与えられます。神様の愛と赦しの中、私たちはすでに永遠のいのちの中に生かされています。身を実らせる人生、神にとって不可能なことはないという人生、主の語られたことは時が来れば必ず成就するという人生。御言葉の種がまかれて、素直に受け入れる者の心には百倍の実りがもたらされる人

生が私たちには与えられています。喜びが満ちあふれる人生がここにはあります。このいのちの道に招いて下さいました神様に感謝して、父ならびに御子イエス・キリストとの親しき、相互のお交わりの中、今年も導かれ、進みたいと願います。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。この寒さの中凍える被災者の方々をお助け下さい。私たちをその本当に困難の状況から、罪と死と呪いの中から救い出すために御子イエスキリストをお与えくださいまして、今は父なる神様と御子キリストとの豊かな、喜ばしい、深き相互のお交わりの中に入れて下さいまして、誠にありがとうございます。どうぞあらゆる苦しめる方々をこの平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン